
巡り逢う陽炎

秋山文彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巡り逢う陽炎

【コード】

N9932U

【作者名】

秋山文彦

【あらすじ】

男には巡り逢わなくてはならない思いがあった。

向坂慎吾は知らなかった

ある夜出逢った、千秋と名乗る女性。見ず知らずの彼女が口にしたのは、慎吾の兄、信二の名だった。

その日彼は不思議な夢を見る。

そこに現れた、もう一人の女性

忘れ去られた思い。

消えて行った記憶。

人として見つめ合わねばならない事。

それら全てが巡り逢う時、慎吾の知らない真実が陽炎のように揺れ始める。

夏の終わりに訪れた、静かなる物語。

夜の暗闇の中に柔らかく浮かぶ光が二つ。ぱちぱちと小さな音を立てながら、線香花火の火花が無数の『花』を描いていた。寂しそうに弾けながら花びらは暗い闇に吸い込まれるように消えていく。その様を眺めていた男の瞳に写るのは淡い輝きをもたらし散り行く、花びらの最期だった。

その侘びしい光源に照らされながら、言葉を交わすうちに、二人を浮き上がらせていた灯りは徐々に小さくなってきた。

やがてぼとり、と地面に落ちた朱はくすぶる暇もなく闇に溶ける。

「あーあ……」

女が言った。暗くなったその場では表情はよく読み取れない。

「終わったね」

そう続けた彼女が、夜空を見上げる。

男も残念そうにああ、と呟く。

やがて浮雲が静かに流れて行くと、それまで隠れていた満月が顔を覗かせた。

石畳が青白く、仄かに色づけされていく。それでもそこに、先ほど散った花びらはなかった。当たり前か。男は思いながら顔を上げた。

月光に照らされた女の顔は切なかった。本来ならば透き通っているはずの素肌も、今宵は生気の抜けたような灰色をしている。それ

が夜のせいなのか、月明かりのせいなのか男にはわからない。

ふと、目が合う。

暗闇にも輝く瞳。やるせなくなった男は、しどろもどろにこう言
った。

「花火をしてる時に無駄な灯りはいらさないから。月はそれを知って
るんだよ」

「じゃあ、もう、花火出来ないね」

そう言うと彼女は、細く、綺麗な指を中空に掲げ、天を指差した。
それに合わせて彼は仰ぐように夜空を見上げる。

目に入ってきたのは黄金に輝く満月。しかしこれまでそれを覆っ
ていた浮雲だけを残し、夜空に他の雲はなかった。

もう月の隠れる気配はない。あとはただひたすらに、月光は地上
へと降り注ぎ続けるだけだろう。

スポットライトに照らされているような二人は、自分達だけの空
間をもう一度見渡す。辺りを包む静寂に、人の気配はない日本庭園
向こうではうっそうと茂った木々が囁くようになびいている。

線香花火の墜落は、一挙にして二人を祭りの後のような気分にな
せた。

「また、いつか会えるから。きっと近いうちに」

その雰囲気に関わりを見た彼女が切り出した。

涼しい夜風が長い髪を揺らす。月光が髪の流れを艶やかに走り、

甘い芳香が鼻腔をくすぐる。そんな誘惑に気を持って行かれそうになりながらも男は決心したように目を見開いて、それに答えた。

「その時は。その時は教えて欲しい」

女はくすりと小首を傾げた。そして彼女はそのまま男に背を向ける。すらりと伸びた足はやせ細っていた。それでも魅力的に思えるのは仕方がない事なのだろうか。これが白昼ならばどれだけ素敵な光景だろう。どうしようもない雑念を抱きつつ、しばし男がそれに見取れていると、そこに奇妙な変化を感じる。と、同時に白い、女のワンピースが不気味に瞬いた。

男の目は女の足に釘付けだった。しかし、その理由はいかがわしいものではない。

この世のものとは思えぬ光景へ捧げる、奇異な視線なのだ。

女の足を透かして見えるのは、青白い石畳である。

実体が消えて行く。

男は啞然とした。

その浸食は上半身にまで達し、美しいワンピースも後ろを透かして、灰色に見える。確実に女は闇の中に姿を消し始めている。徐々に見えなくなるその姿。まるで暗黒の彼方に吸い込まれていくように。

「おいっ」

やっとの思いでそう言ったはいいが、その言葉よりも彼女の姿の消える方が早かった。

女のいた場所に残るものはもう、何も無い。ただ侘びしく、虚し

いだけの空間が広がっているだけだった。

呆然としながら彼は膝をつく。その時だった。彼が、風鈴の音色を聞いたのは。

ちりん。

爽やかな音色だった。混じりつ気も湿り気もない乾いた音。単調なのに、深いその音色は夏に響くからこそ意味を持つ。

そして、ひぐらしの鳴き声が響く夕暮れ時に、茜色から木霊する鳥の鳴き声。

男は夏の夕暮れの声と風鈴の囁きに目を覚ました。

八畳程のアパートの一室で目覚めた彼は、微風で揺れる扇風機を止めて、まだ完全に開ききらない瞼をこする。

携帯電話を開いて、時間を確認しようとした時、外で子ども達の無邪気な笑い声が聞こえてきた。

今日も少年野球の練習が終わったらしい。時間にして六時過ぎだ。それを知っている彼は、携帯電話まで伸ばした手を引き戻して、その手を支えに立ち上がった。

夕方の涼しい風と扇風機にあたりながら眠っていたとはいえ、汗は顔に滲んでいる。眠気の残った瞼を擦りながら、ベランダへ出た。遠くの空が黄昏に染まる。頭上の空にはまだ青みが残っていた。

柵に寄りかかって、深く息を吸うと、ぼやけていた気持ち晴れて来る。しかし今日は何だか様子がおかしい。視界に広がる街の流れに目を向けながら、そんな事を思っていた。

けたたましいトラックのクラクションの音が耳をつくくと、男は我に返る。おもむろに柵から身を乗り出すと、アパートの手前を走る道路でトラックと原付バイクが立ち往生していた。

衝突の危険があったのだろうか。漠然と思いながら、男はふと気が付いた。頭がまだぼんやり霞がかかっているようだ。

まだ目が覚めないのか。

そう感じ、洗面所へ向かった。さっと水で顔を洗い流して鏡と向き合う。すると、自分の顔を目の当たりにした男はそれまで感じていた眠気の正体が不思議な違和感であった事を悟った。

気持ちのいい土曜日の昼寝で、眠りすぎたとしても、こんな寝疲れはそうない。鏡を見ながらそう思った彼は、先ほどから頭を覆う違和感を自分の瞳の中に見た気がした。瞳の中に浮かぶのは、ちかちかと瞬く、とても目に優しいとは言えないような輝きだった。

そして彼は気付く。

その輝きの中から違和感の答えを導き出したのだ。

「あの夢だ……」

とても不思議な夢だった。

線香花火をしていた男と女。辺りの静寂に、寂しい日本庭園。

彼は、今それを思い返しただけでも妙な気分陥ってしまう。

切なくて、懐かしいと言えはいいのだろうか。

意味の理解出来ない、夢の中の情景にそんな感情を抱いてしまう。夢とはそういうものなのかもしれない

と、あっさり感傷的に済ます事を男は嫌った。

あの夢はおかしい。違和感があ夢であると気が付いた今、男は確実にあの夢に対して動揺を覚えている。彼の胸の内を揺さぶっているのだ。

そうして、心が揺れ動く度につきんと痛みを感じてしまう。

そして一番気になる事 それは、あの女性だ。

長い髪。白いワンピース。美しい足。……甘い香りもした。夢の中にみた女神の存在がすぐそこに感じられるほど、彼女の姿が
ありありと頭を埋め尽くしてゆく。

やがて、頭に再生されるその姿がすうと薄くなる。

そう、あの夢のように。暗澹とした男の頭の闇に呑み込まれるようにして。

ついに姿が見えなくなると、疑問が男の口をつく。最もな疑問だった。

「彼女は、誰なんだ？」

だが、誰だかよくわからない。鏡の自分に訴えるも質問は質問で
むなしく返ってくるだけだった。

しかし声に出してしまうほど、彼女の存在に彼は意味を感じた。

名無しの彼女

夢全体を見てもそうだったが自分の創り出した夢の女性に、それ
以上の深い何かを男は感じる。夢に異性が登場すると、途端に意中
の相手になるというが、それとは似て非なる感情が渦巻いていると
言った方が正しいのかもしれない。

とは言っても

やはりどうする事も出来ない。

いくら、深い感情を抱いても何か出来るというわけではない。
そのやるせなさや歯がゆさに男は肩を落とした。

「近いうちに会える、か」

心に焼け付く、夢の女性のワンフレーズを口に出す。本当に会えるのだろうか。もう一度、夢に出てくれるのだろうか。結局は自分次第か、と苦笑した。酷く虚しい願望に寄りすぎる自分の引きつった表情が鏡一面に広がるのを見て、男は再び口角を上げた。もちろん、心の底から笑えるわけもなく、無理矢理に。

「はあ……」

その時、インターホンが鳴った。

我に返り、顔を赤らめながら、彼がどたどた慌ただしく受話器を取ると、赤井光一の神経質そうな声が耳に響いた。

『向坂。俺。今、いいか？』

「赤井か？ ……いいけど……」

向坂と呼ばれた男　向坂慎吾むかしばかしのぶが気だるそうに受話器を置いた。

ほんの数秒前まで冴えない気分と訳の分からぬもやもやに支配されていたのだ。その気分を払拭するためもう一度、顔を水で濡らす。

そうこうしていると直にドアホンが鳴った。ドアスコープで赤井の歪んだ姿を確認した慎吾は、チェーンとロックを外して目の前に佇む友人に問い掛ける。

「よお、どした？」

「わりいな、急に」

「まあ、上がって」

神妙な顔付きの赤井を部屋に上げた慎吾の表情は、何とも怪訝だった。赤井の事前連絡無し of 訪問が原因でもなければ、彼という人間が嫌いな訳でもない。ただ、赤井が部屋に来ることの珍しさと、彼の不穏な雰囲気に対しての表情だった。

「珍しいな、お前が来るなんて」

「……ああ。まあ電話よりも会う方がいいと思って」

「え?」

赤井は気難しそうに腰に手を当て、逡巡している。いつものこいつらしいが今日に限っては酷くいらいらさせられた。何故だ。

「言えって」

慎吾は踏み切った。ならば先を促すまでだ、と。実際それは正しい判断だっただろう。その一言がなくとも、遅かれ早かれ、慎吾は赤井の言葉を聞くことになっていたのだから。そして、遅かれ早かれ、その一言に彼は胸の奥が大きく突き上げられるのを感じるようになっていたのだから。

「あの、彼女についてなんだがな」

慎吾の胸の奥が、ずきん、と鳴った。

コーヒーを両手に赤井のもとへ向かう。

「まあ、座れよ」

ぎこちなく佇む赤井に、慎吾は言った。しかし、うまく言えた自信はない。

彼もまた、動揺していた。

そしてその言葉を真に受け取っても、部屋に座る場所など皆無だった。唯一の椅子であるデザインチェアも書類と書籍で埋まっている。お洒落とはほど遠い、残念なデザインチェアに落ち着ける訳がない。つまり座るとすれば、フローリングしかない。しかし、そこにも赤井は座ろうとしなかった。むしろ、ずっと立ち続けているような印象を醸し出している。

礼を言いコーヒーを受け取った赤井は案の定、そのままの状態でお話を始めた。

「千秋ちゅうきゅうと連絡が取れないんだが」

友人のその言葉に慎吾は頭の中がいよいよ混乱を始めるのがわかった。

「…………え？ 千秋？ ……ああ」

「昨夜、千秋と最後までいたのはお前だ。何か知らないか？」

昨夜か

その時、初めて気がつき、慎吾は唾然とした。
昨夜の記憶が半分ない。
しかし、千秋という名と彼女については覚えている。

昨夜の記憶を辿ってみる。

居酒屋で呑んだ後に千秋を駅まで送って行った。
そして、終電が迫っていたので二人して汗をかきながら走った事も彼は覚えていた。

しかしそこから、千秋の行方は全く存じない。

赤井にその旨を伝えた慎吾の顔は曇っていた。

千秋と連絡が取れない……

確かに気になる。しかし、連絡に気付いていない可能性も高い。
アルコールも入っているはずである。自分がそうだったように泥のように眠っているかもしれない。

簡単に否定出来るほど物珍しい話でもないだろう。

慎吾はその考えを宙で組み上げた時点で納得は出来ていた。少なくとも、心のざわめきは落ち着いていた。

そのため慎吾はその考えを赤井に伝えたが、彼は納得の行かない表情で頷いただけだった。

赤井光一の性格ならよく知っている。

また単なる考えすぎだとも思ったが、いつも以上に友人の顔は優れない。

その様子に平穏を取り戻しつつあった慎吾の心にも再び陰りが生じ始めていた。

それから逃れるように彼は提案する。

「俺からもう一度、掛けてみようか」

「頼む」

昨日、千秋から教えられた電話番号をアドレス帳から選択して発信する。

昨夜の光景が頭に浮かぶ。

赤井と共に意味のない話に花を咲かせていた。

いつもと変わらぬたわいのない話は、本当にいつまでたっても中身に成長は見られない。

そんなどうしようもないながら、素晴らしい時間を二人は過ごしていた。

しかし、徐々にわびしさも感じてくる。

そんな赤井と慎吾、二人の寂しくなりつつあった酒の席で突如現れた女性、千秋。

下心もほどほどに自分達の席に招いた事への天罰か否か。

その裁定を待つかのように慎吾はマイクに耳を傾けていた。

五回目の発信音が響いたあたりから二人の口内に妙な唾が溜まりだしてきた。

ごくり、と慎吾が喉を鳴らす。

その緊張の裏では、やはり単なる考え過ぎではないかという気持ちもあった。

あまり、電話を鳴らしすぎてもこちらの勘違いだった場合、それこそ単なる迷惑行為である。

ジレンマがあったが、やはり大事に至る事態を想定すれば、電話を架け続ける事が正しい。

それに先程から慎吾に走る、妙な予感が彼を突き動かしている要因でもあった。

そう、これは何か、一種の予感だ。何かがかんがらがつている。何かがあるのだ。

疑ってかかれ。

駆け巡る思惑と共に胸の高鳴りも早さを増していた。

ようやく、八回目の発信音が途切れて、明るい女性の声が向坂の耳に響いた。

一拳にして安堵の息を漏らす。その様子を横から見ていた赤井もほつとした風に息を吐いた。

「あつ？ 千秋ちゃん？」

『ごめんねえ、ちょっと眠ってて……』

「ごめん、起こして……あれから少し気になって……」

慎吾の当初の予想である、千秋は眠っているかもしれない、は見事に射っていた。

深い猜疑と現実との狭間に彼は見事に肩透かしを喰らった気分になる。

慎吾の千秋への通話を聞く限りで、そんな彼の晴れない苦悩を考えた赤井は苦笑した。

「実はあの昨夜、変な胸騒ぎがしたんだ」

訪れた安堵に赤井はすっかり肩の力を抜いていた。

だから、友人の言葉のキザぶりに自然と笑みがこぼれる。

しかし当の慎吾はそれどころではない。
真つ当であり、極力、『良い具合』の言い訳を考えねばならなかつたのだから。

「だから、気になって電話してしまつて……ごめん、ホント変なこ
とで迷惑かけてしまつて」

しばらく会話が続いた後、二人の通話は終わった。
安心仕切っている赤井は軽く慎吾の肩を叩いて言った。

「俺の考え過ぎだった。迷惑かけてしまつたな」

「ああ……」

赤井には色々と言ってやりたい気分だった。

しかし、彼女に何もなかつたのであればそれはそれで良いのだが……

「向坂？ どした？」

安堵する赤井の隣で慎吾だけはやはり、違和感を感じずにはいら
れなかつた。

妙な気持ちはまだくすぶつたままであつたのだ。

『また会えるから。きっと近いうちに』

めくるめくその言葉は慎吾の頭を掻き乱し続けていた。夢の女の、
あの言葉が……

だがこのくすぶりに答えは出ていた。

そうだ。間違いはない。全て、真実なのだ。俺は本当に昨夜、胸騒ぎを感じたんだ。

確信し、慎吾はたらりと冷や汗が滲み、零れるのをにわかを感じた。そして、先程の千秋の声を頭に思い返す。更に、頭に流れ続ける夢の女の声がそれに被さる。

それらの声たちが完全な一致をしないところが不気味であり、違和感を感じさせる。その気味の悪さが背面を這いずり廻る。そしてそれは悪寒として体を震わせた。

慎吾にとって皮肉なのは、身を感じる不調がそれだけではなかった事だ。彼は自分自身にさえ、奇妙な違和感を覚えていた。

ふわふわと浮遊感を足下に感じる。

自分は自分なのか？ と馬鹿げた質問をしてもおかしいとも思わないほど、体が軽く感じられた。

そんな、自身にも降り注ぐ異変に彼の顔は遂に青気付き始めた。

「赤井、悪いが」

焦りを強く感じ始めた慎吾は友人の帰宅を丁寧に促した。

「今日は悪かったよ」

「ああ。千秋ちゃんにも」

慎吾の皮肉の裏に赤井は友人の不調を感じ取る。大丈夫か、と赤井は問いかけようとした。しかしそう言う前に慎吾が扉を閉めきつたので、彼の心配が届くことは遂になかった。

一人になる。

冷静になって考えねば。

とにかく、昨夜から、自分を含めて何かがおかしいのだ。

外の景色に目をやると、夕日はすでに顔を出していた。薄い空に輝く星も確認出来た。

清々しい、素敵な光景だった。

まじまじと外を眺めたのはいつぶりだろう。

向かいの道路に赤井が見えた。彼は振り返る事なく建物の陰に消えた。

友人の背中を見送ると、瞼を強く綴じて、息を整える。

整理しないといけない事がたくさんだ。

一体、何処でネジは外れたのだろう。

彼はそれについて考えるほかなかった。

向坂慎吾は自分がアルコールを摂取すれば記憶を飛ばしてしまう事を誰よりもよく知っている。

昨夜も少なからずアルコールを摂取した。

彼は自己解析に基づき、自分が極楽に至る寸前の量のアルコールを喉に流し込んでいる。

それでも、寸前という曖昧な線引きのため、もしかしたら記憶を飛ばすに至る量を呑んだ可能性もあるのだ。

それが影響してか、彼は記憶を半分失っている。しかし、それはそれとして、慎吾の頭にどうも、納得の行かない事実が浮上してきた。

記憶を失ったタイミングがおかしいということだ。

千秋と合流して約二時間後、居酒屋で赤井と解散して、彼女を駅に送って行った。その際の記憶はありありと残っている。

ではどこで記憶は途切れたのだろうか。

昨夜の記憶を辿ってゆくと、千秋が駅舎に消えるのを見届けてからの記憶がぶつりと無い事がわかる。

慎吾の記憶が正しいのならば、このような体験は大学三回生である彼の人生の中で一度としてない。

駅舎に消える彼女を見送った。その際、言い知れぬ妙な胸騒ぎを感じる自分がいた。その感情を最後に、昨夜の記憶は無い。そこから先を覗こうとするが、一つとしてその続きが彼の頭に再生される事はなかった。

「いや……待て……」

昨夜の千秋をフラッシュバックさせる。

駅舎に消える直前の彼女が目に見えた。改札を抜けた彼女は自分へ振り返り、手を振る。そして、

「何だ？」

彼女の口が動きを見せた。別れの言葉を発する口の動きではない。しかし、何を言っているのかよく聞こえない。もの悲しげな表情からも見いだせるものはなかった。

「何と言ってる?」

そして再び、彼女が同じ言葉を放った。

「……え?」

彼は、埋もれていた千秋の発言の記憶を思い出し、愕然とした。
彼女は何故、そんな事を言った?

何故、彼女が

『しんじさん』

信二。

「兄貴の名前を?」

向坂慎吾の兄、向坂伸二。さきさかしんじ

この名前を聞く度に弟、向坂慎吾の目頭は熱くなり、虚無感に苛まれる。

三年前。

学校からの帰宅途中、慎吾の携帯電話に着信があった。実家からだった。珍しい、と思いながら電話を取ると、鼻を詰まらせながら母が言った。

『伸二が亡くなった。事故にあつた』

頭から針を突き刺せられたような冷たい衝撃が走つた事を弟は忘れない。心臓が早鐘を打っていた。

向坂慎吾が兄を思い起こす度、彼は事故死した兄を悔やむ気持ちを蘇らせてしまうのだ。こういう風に言えば聞こえは良い。だが、兄弟仲は最悪だった。

何故、仲が悪いのか？ と言われれば根本的な部分で全く『そり』が合わなかった。兄の生前に弟は、それを聞いて来たごく一部の人々にそう答えてきた。兄の死後には、そう言うことはめつきり無くなつたが。

高校卒業後に、直ぐに職に就き地元を離れた兄。

弟は、それだけで清々した。

『せいせいしたよ』

若さ故のものかも知れないがそのような発言を何度も繰り返して

きた。

弟は兄と全くとて連絡を取らず、盆や正月のような帰省時期には敢えて兄が帰省日数を減らすという行為を行った。

しかし、その兄が死んだ。

その現実には弟にとつてもない悲しみを与えた。いつも過剰なまでに距離を置き、何一つとて自分との良い思い出のない兄なのに。なのに、何故悲しい。その哀れな疑問の答えは自然と直ぐにわかった。彼の心の奥底に確かに眠っていた。

家族。

かけがえのない、家族の一人との繋がりが途絶えた

その現実には、弟の心にまとわりついていた重き鎧を砕いた。

あまりにも遅い、その解放に弟は自らを呪った。いつまでも、いつまでも。

彼は自分を責め続けた。

そんな兄の名を確かに千秋は口に出した。

何かの聞き間違いという事はまずない。

彼女は印象深い瞳をたたえながらそう言ったのだ。

(兄貴の知り合いか?)

千秋という謎過ぎる人物像をもつともな理由で仮定してみる。

それを確実なものとするために再度、彼は千秋に連絡を取ることにした。

胸に突つかかる出来事の多すぎる今、自分の中で判明した事を一つずつ片付けていく。

慎吾はそれを行動に移していた。携帯電話を取り出して、発信履歴の一番上から『千秋』を選択する。記憶に新しい番号が表示された。

彼はアドレス帳にデータを登録する際、人物でも店でも、必ずフルネームで登録を行う。

恋人にしても、親友にしても。

家族にしても例外はない。

しかし、千秋は『千秋』のままだった。

理由は単純だ。

慎吾は彼女の名前しか知らないのだ。紹介の時、共にいた赤井も名字は知らないはずである。

つまり、彼の中で千秋は『千秋』として存在しているだけである。それほどまでに、彼女の存在は謎だった。

流石にあまりにも軽はずみで軽率な行動に出たと、昨夜の体験を自身で危惧するしかない。

しかし、幸か不幸か、その経験から収穫したものはとても大きなものだった。

そして何より、気にすべきものだ。この対局的な葛藤に慎吾は苛まれつつ、彼は発信キーを押した。

電波が飛ばされる中、彼は考えていた。
さっきの件もある。

どんな風に話を切り出せばいいのか。

微笑みながらか、苦々しげにか、それとも、何事もなかったかのようにか……

こんな時でも、つまらない建て前が次から次へと思考を支配する。しかし、核となる部分だけは慎吾を嘲笑い続けていた。もちろん、彼はそれに挑むつもりだ。忘れるはずもない。

心の片隅で、彼女の迷惑を考えてもみた。しかし、兄の関わる謎への探求心は慎吾のモラルを上回った。

出ない。

慎吾は苛立ちを感じた。何度コールしたかわからない。先ほどの電話が嘘だったかのように、長い発信音が無機質な音を奏でている。

しかし、その間も慎吾の心臓はどくどくと、動きに血の通った働きをしていた。そんな流行る気持ちに拍車をかけるように千秋の言葉が気になって仕方がない。

『……伸二さん』

霧のように噴出した昨夜の千秋の言葉。彼女はその言葉から何を伝えたかったのか。彼女の謎めいた一言は、また同じように柔らかく消え去った。

「駄目か」

また、時間を改めた方がいい。

次第に気分が落ち着いて来るのを感じた。心臓の高鳴りも徐々に小さくなってゆく。すると途端に、彼は罪悪感に包まれた。

千秋に対する自分勝手な行動、それにつきまとう後悔が波のように襲ってくる。

顔が紅潮し、恥も感じた。
悶えるような気持ちを抑えるには、一連の奇妙な出来事への反応、と称して自ら納得させるしかない。

冷静になれ、と思い立ち静かにフローリングに腰を下ろした。
そうだ。あまり早まり過ぎるのも問題である。

再び扇風機のスイッチを入れて微風を身体に当てる。
開いた窓を後ろに扇風機を回しているため益を過ぎたこの時期の夕暮れ時の風がひんやり気持ち良い。

真夏のピークも過ぎ去って、日も短くなった。
午後七時前の空は紫に染められている。
月も遠慮がちに姿を表した。

涼しい夕暮れに夏の終わりを感じた慎吾は、だいぶ冷めてきた頭に巡る謎について、再度思考を働かせる。

しかし、頭は長くは働かなかつた。
空腹が無邪気に邪魔をする。

そういえば、昨夜の居酒屋から食べ物は何も口に運んでいない。

やはり行動するには早すぎた。何か採らねば。
動くのはそこからだ。

食欲に従い、彼はキッチンへ向かった。

鍋一杯に水を汲み、電気コンロへ置いた。火力を最大に設定して、湯を沸かす。

八分ほどで水は熱湯に変わり、ぶくぶくとたぎる気泡を生み出し始めた。

その熱気に額に汗をかきながらも、素麺二束を投入して茹で始めた。

今年の素麺は恐らく、これで食べ納めだろう。

と何気ない思いを頭の中へ、鍋に入れる素麺と同じように投入する。余裕あつての行為ではない。

余裕が無いからこそ雑念を広げたかった。

今だけは逃れたい気持ちがあつたのだ。

慎吾のこの行為はなんとか実を結んでくれた。

夕涼みの中の素麺は、彼にささやかな安らぎを与えてくれたのだ。

今年の素麺納めは平和に終わった。

薬味の生姜の風味を口内に残して、彼は早速意気込んだ。準備は万端だ。

立ち上がり、洗面所へ向かった。

髪をしっかりと水で濡らして、整髪料を付ける。

無造作に髪を整えて、着替えに入る。ジーンズに白い長袖シャツに身を包んで、自宅を飛び出した。

長袖シャツで正解だった。外は身体が少し身震いする程に涼しかった。

あちこちに見受けられる家々の灯りと、遠くの高層ビルの灯りが黒く淀み始めた紫の空に映える。

午後七時半の夜空は、殆ど活動を終えようとし、これから夜の顔に姿を変えようとしている、ちかちかと誘惑的な街並みを見下ろしていた。

そんな街を慎吾は走る。

ただ、何でもいいから、何か手掛かりのようなものが欲しかった。

兄へ繋がる手掛かり。

兄と繋がれる手掛かり。

遅すぎた思い出を手探りで掴み出す事はもう散々やった。

その際、慎吾は驚いたものだ。

兄との記憶は、大河のように広く、深海のように深いものばかりだった。

小さい頃の記憶がほとんどだったが、色褪せたものは何一つ、なかった。

瞳が夜風に冷たい。

慎吾は鼻をすすり、駆けて行く。

やがて、見えてくる。

煌びやかに佇む建物からは、耳になじんだアナウンスが流れていた。千秋と別れたあの駅が、姿を現した。

改札を抜ける。

駅のホームは閑散としているがサラリーマンや学生の姿がちらほら見られる。

人はこれから多くなるのか、もっと少なくなるのか。もう、ピークは越えたのか。

この時間帯に駅をあまり利用しない慎吾にそれはわからない。ただ、閑散としたこの空気は人混みによる淀みよりも遥かに彼を落ち着かせた。

やがて、準急電車がホームに滑り込む。そこにいた人々はみんなそれに乗りに込んだ。降りるものはいない。ホームは空になり、後に残るのは虚しく響くアナウンスだけだった。

一駅先が千秋の街である。別に彼女に会いに行くわけではない。そもそも、誰も彼女の住まいを知らない。

何があるかわからないが、何か手掛かりがあるという予感。慎吾の中で湧いていた。まだ力の弱い予感だが、それを信じる価値はありそうだと、電車に揺られながら慎吾は考えていた。

窓外に目をやると、漸く暮れた空が広がっていた。青さはなく、街から溢れ出す境界のない光芒がぼんやりと空を照らしていた。

そこに浮かぶのはビルの屋上に灯る赤色灯。それが、まるで星の輝きのように規則的な明滅を繰り返す。

ネオンに彩られた通りの灯りも眩しい。

居酒屋達もこれからが本番だと言わんばかりにその看板を明るく掲げていた。

この時期、夜になれば街に夏を感じる事は出来なかった。

どこの花火大会も夏祭りも、盆前に終了しており街を賑やかに彩ってくれるのは、どこかのキャッチの呼び掛けと街を歩き交う人々の波だけだ。

その波から生まれる、歓喜も悲劇も欲望も、全てが一緒くたになっ
てむせかえっている。

これが夏の終わりの姿だった。

誰かの描いた、清らかな姿はもうどこにもない。

これもいつものことではないか、と目を遠くする慎吾だったが胸
の内で揺らめく思いは今年がそうでない事をありありと主張してい
る。

だから、自分はこの電車に乗っているのだ。

今年の夏の終わりは、いつもと違う。

静かな街だった。

慎吾は一駅の間、街というのはこつも変わるものなのかと息を吐いた。

ぐるりと辺りを見渡す。

閑静な住宅街に、小さな商店が建ち並ぶ駅周辺。賑やかなのはこの辺りくらいなのではないだろうかと言えるくらいに反対側は暗かった。

不思議な街だな、と彼は思いながら歩を進めた。しかし三步程、進んだ所で彼は漠然とした。

何か予感があるにせよ、何をどう行動すればいいかわからない。とんだへマだ。

「参ったな……」

ごもつともな独り言をこぼして駅へ戻り、ベンチに腰をかけた。しばらく目を泳がせて考えていた彼は漸く、何かを閃いたような目をして膝を軽く叩いた。

「そうだ」

何かいいアイデアを思い浮かんだような表情と、バツの悪そうな表情を同時に浮かべた慎吾は携帯電話を取り出して、とある番号へ発信した。

「先にしとけばよかった」

ぼそりと悔やんで、相手の受信を待った。直ぐに電話は繋がった。

「ああ、母さん？　ちよつと、いいかな？　調べて欲しくて……」

通りを歩いていたら初老の男性が、真剣な眼差しで電話に耳を貸している慎吾の前を通過した。

その彼の張り詰めた雰囲気には老人は心配そうな視線を飛ばして、そそくさと去っていった。

「　うん、そう。……はい……はい。わかった。ありがとう。じやあまた。お休み」

今回、慎吾の予想はストレートに当たったようである。

この街には、やはり何かあった。母との電話で知り得た事実が二つ。

向坂慎吾の兄、向坂伸二は亡くなった年の最期の夏、この街にやって来ていたという。千秋との関係はわからなかったものの、得た情報は大きい。

そして、この街のある所へ兄は足を運んでいたという事。

これには慎吾も導かれるような、浮ついた感じが背筋を貫くのを禁じ得なかった。

行くしかない。

慎吾は兄が生前出向いたその場所へ向かう。

駅を離れて、街灯もまばらな暗い通りを進む。

かつて兄も歩いたであろう、その道を。

とある庭園のレシートを、実家に保管されている伸二の財布の中

から、彼の母親が取り出した。

向坂慎吾からの連絡が何を意味するかはわからなかったが、彼女はおもむろにそれを取り出していたのだ。そして、その庭園の名を告げると懐かしい声を残して電話は切れた。

その場所こそ、慎吾が今まさに居る庭園なのである。

彼はひしひしと、偶然ではなく、必然を感じる。

そして、慎吾は啞然とした。

「……………まさか……………」

歩を進め、庭園の外観が視界に広がるに従って彼の胸は躍っていた。そして、うすうす感じていた予感に光るものを見出した。

やはりそうだった。この場所には見覚えがある。

庭園の豪華な正門は慎吾に荘厳な佇まいを見せている。そこから中を見るとこれまた立派な庭園が顔を覗かせていた。

正門をくぐる。

入場に関して、料金の徴収はないらしい。

無料開放されているこの庭園は一歩足を踏み入れただけでも、広大な面積を誇っている事を感じさせた。しかし閉門時間が迫っていた事もあるのだろう、人気は無い。

そこをひた走る慎吾。

はやる気持ちが彼の全身を駆ける。

(ここは夢で見た、あの場所なのか?)

木立の間に等間隔で設置されている灯籠は、投光器の役割を果たしているようだ。

それらの灯りは並木道を美しく照らしていた。その神秘の中を駆ける彼は、ただひたすら前しか見ていなかった。

やがて、目の前に展開してきたのは石畳の庭園。
足が止まる。

荒い息遣いに混じるように、虫の鳴き声が静かに響いていた。優しく涼しい夏の夜風が、頬を伝う汗を冷やす。

「やっぱり、やっぱり、ここだ」

夢で見たあの場所だ。間違いない。

彼の頭の中で加速を始める何かが疼きだした。

「ここだ……ここだ！」

慎吾は駆ける。

辺りを包む静寂に、彼の足音だけが轟く。夢で見たあの場所に違いない。この光景。

あの寂れた日本庭園は、間違い無くここだ。

彼の思考が紛れもない確信を弾き出した。

それと同時に一つの疑問が走る。

しかしそれは疑問という形ではあるものの、どこかその役割を無くしていた。

「……あれは夢じゃないのか？」

その疑問に彼は、肯定の予感を強く感じる。

わかっているじゃないか。

そんな事に頭を悩ます必要はないという事を。

あれは全て

「現実だった……」

言葉が口をつくと同時に、不気味な風が吹いた。

木々のざわめきをよそに汗の引ききらない慎吾の身体は、涼しさ以上の寒さを感じる。

全身を揺らす悪寒に、身体が反応する。

ひんやりとした冷たい雰囲気には彼は後ろを振り返った。

そこに、誰かいた。

灯籠の灯りに照らされて、一人の女性が佇んでいる。

長い髪が夜風になびく。優しく微笑む彼女に慎吾は俯きながらも自然と発せられる言葉に身を委ねた。

「近いうちに会える、か。昨夜、俺と君はここにいた。どうして？」

にこりと口許を緩める女性は優しく諭すように慎吾に答える。

「昨夜の事……わかってるんだ。あなたが今ここにいる理由と、答えは同じなんじゃないかな」

この声だ。

「同じ？」

「そう、同じ」

やはり

「なら……教えてくれ。昨夜の最後にも俺は言ったけど、君は誰で、何のために俺と出会った」

そう言い切って、慎吾が口を濁す。まだ頭にひっかかる。

「昨夜が現実なら、君は誰だ？」

彼は完全に昨夜を現実と捉えた上でそう問い掛けた。

夢ではないと胸の何処かで強く否定する慎吾がいた。夢であつてほしくない気持ちもあつた。

今の状況が淡い希望のようにさえ思える。
何に對しての希望か。全てはこの女性が握っているに違いない。

慎吾は目の前にいるその女性の瞳をしっかりと見据えた。馴染みのある瞳の色、形。

女性はその視線に呼応するように、滑らかな口を開いた。

「私は木村と言います。木村千夏きむらひつが」

「きむら、ちか……」

男の頭に初めて聞く名前が刻み込まれた。
だから余計に気になる。

自分と彼女の、邂逅の理由が。

木々の咆哮、葉のささやき、風の吐息、胸のざわめき。慎吾は揺れていた。

「木村さん。昨夜、俺とあなたは」

「ここにいた」

「そう……それ。どうして？」

その質問に、千夏は顔を横に向ける。ふわりと髪が舞い、耳に付けていたシルバーのイヤリングがかわいらしく揺れた。

そして彼女は思いを馳せるようにこう言った。

「あの人の思いを埋もれさす事なんて出来ないから」

彼女はそのまま歩を進める。庭園を横切って、隣接されたお社の前までやって来た。

慎吾が無言のまま後に続く。

そして、千夏が重い口を開いた。

「伸二君の思いを、あなたはまだ知らない」

「え？」

貫く衝撃。

目の前が真っ白になり、足下からバランスを崩しそうになった。

言いたい事はたくさんある。聞きたい事もたくさんある。

しかし、頭がうまく廻らない。どれだけ振り絞っても、素っ頓狂な反応しか示す事が出来なかった。

兄貴。何故だ

これは兄貴の仕業なのか？ 兄貴は何がしたいんだ？
千夏の言葉を借りるならば、兄貴の思いとは何なんだ？

コーヒーに混ざり合うミルクのように不規則な模様を描きながら、向坂慎吾の疑問は渦巻きに渦巻く。
めまいさえ感じてきた。しかし、それも当然の事といえる。

向坂伸二を知っている人物が半日のうちに二人、現れた。
千秋と、木村千夏。うち木村千夏は、向坂伸二についてとつとつと語り出した。

慎吾の早まる気持ちを無視するかのようなその口振りには、何かを懐かしむようなそれでいて、悲しげな感情が含まれていた。

そして、一つの結論に達したように千夏がその言葉を口にした時、慎吾は感情の高ぶりを強く感じた。

それでも真実味のない言葉を再度確かめたくて、男は聞き返す。

「兄の……恋人？」

千夏は無言のまま頷く。その肯定を次いで、ゆっくりでありながらも語ってくれた。

自分がかつて、伸二と同じ職場で働く同僚であったという事。そこで仲を深めて恋愛関係にまで発展をしたという事。

昨晚の女　あの千秋という女性は自分の妹であるという事。
千秋は慎吾をこの場へ誘うために動いていたという事実までも。

慎吾はそれら一つ一つが溢れかえらないように整理を続ける。彼にはそれをするだけで精一杯だった。

何とか片をつけて行くと、全ての根底にある理由だけが語られていない事に気付く。

それについてはまだ口をつぐんでおくつもりらしい事が、思い馳せる千夏の表情から読み取れた。

「優しさが透き通るように良い人だった」

自分の知らない兄の人物像に弟は奥歯を噛み締める。

家族でありながら、兄について知っている事はほとんどない。

千夏の言葉を頼りに彼の頭の中で、今は亡き兄の人物像がほとんど一から構築されて行っている。歪んだ印象を抱いたまま別れてしまった兄の知られざる人柄に弟は自らを悔いた

向坂伸二は泣いていた。

外は快晴。

素晴らしい日和の今日三月三十日は彼にとって忘れられない日となるだろう。

地元を飛び出して、遠くはるばる都へと繰り出してきた。
全ては自分のため。家族のため。

彼はこの地を求めて、職に就いた。だから、一人都にやって来ること、そこで一人でやって行くことも、全て彼が決めたものだった。

強く決心していた。
覚悟も充分だとタカを括っていた。のに、今、彼を包むのは後悔の念だった。

引越し作業が終わった。
すっかり様になった男の新たな城は新生活への第一歩としてはなかなかの威厳を醸し出している。

そこに佇むのは、彼一人。
作業の終わりは祭りの後だった。
突然重く苦しくのしかかってくる感情の波は素晴らしいものであった。

玄関扉が無情な音を立てて閉じられた瞬間に、伸二はただならぬ寂しさと不安に潰された。

眩しい新天地の日に照らされながら彼は安ずる。俺は一人でやっていけるのか、と。

恐怖が彼を襲い、氣力を奪う。

熱くなる臉からは涙が一筋這いだした。

更に、意に反して笑う膝は彼が佇み続ける事を許さない。

膝を着いて嗚咽する伸二。

溢れる涙が新品のカーペットの上に滴り落ちて、透明のシミを作り出す。

この地を求めた事を、伸二は激しく後悔した。

まだまだ慣れぬ独りの恐怖は彼の心に巣くい、それは未来への希望さえも喰い尽くしていた。

頭から流れ出るのは、まだ彼に希望があつた頃の励ましの言葉だった。

『これから頑張るんじゃないのか』

『すぐに慣れるさ』

散々聞かされてきたその言葉達を、彼は余裕に任せて聞き流していた。

皮肉な話ではあるが、ついに孤独となった今こそ、それらの言葉を誰かに、すぐ耳元で、投げかけて欲しかった。

とはいえ、人間慣れるときは慣れるものだ。

その間隔は個々によって違つたろうが少なくとも伸二は数週間で新たな環境に順応した。

自炊も掃除も、一通りはこなせるようになった。

社会人として規則正しい生活をしようと志し、結果、健康な生活リズムを手にも出来る。

そして、今日もまた、彼の新しい一日が始まるうとしていた。

鉛色の空を見せていた昨日とは一変して、今日の空は青々と透き通っている。

雲一つ無い快晴に感動を覚えた伸二は、ベランダに出て大きな深呼吸を行った。綺麗な空気が体内に浸透していくのが実感出来る。慣れれば気持ちの良い新生活のおかげか、彼の中で当初抱いていた後悔は綺麗に払拭されていた。

電線に群がっている小鳥達が今日もさえずっている。昨日もだった。

しかし、昨日のさえずりとは明らかに違う。

今日のそれはどこか弾んでいる。軽快なハミングのようにも聴こえた。

きつと鳥達も、この快晴を仰ぎ、喜んでいるのかもしれない。

ひんやりと涼しい夏の朝の爽快感に伸二は今朝はうん、と冷たいアイスコーヒーが飲みたくなった。

からん、と氷を鳴らして。
ごくり、と飲み干す。

そんな事が優雅に出来るのも、新しい生活を手に入れたおかげからだった。

しかし、新天地で得るものはそれだけではなかった。

彼は今まで、自分でさえも感じられなかった事に気が付く。

無論、それが向坂伸二という人間を新しく磨き上げる事となるのだが。

彼はこの生活を始めて、自分独りという無力感の中にそれを見出した。

それこそが家族の意義と大切さ。

伸二は真つ先にそれを胸に刻み込んだ。

ある雨の日だった。

彼はふいにそんな思いにぼんやりと浸っていた。

霧のかかったような朧気な意識が彼を遠い世界へ引き連れて行く。

するとその中で、ぽつんと佇む光を見た。

その光は何をするでもなく、ただ立ち尽くしている。

家族という意識の中で出会ったその光は決して、伸二の中での『家族』には溶け込んでいない。

伸二がじつと見つめても、ひたすら、寂しそうにその淡い光を主張していた。

何故、そんな所にいるのだ。

と、問いたい気分になるも、その答えには自分自身が関与していると伸二は誰よりもよく知っていた。

なのに、何故、問いかけたくなるのだろう。

彼はまだそれを知らない。

まだ気付いていないのだ。

意気込み、声をかけようとした。しかし、妙なプライドがそれを抵抗へ変える。ならば手招きはどうか。その思った刹那、佇む光は消えていった。どうしようもなくなった伸二は上げかけた右手をそっと降ろす。

そして、光は伸二に一つの思いを抱かせた。

「あいつ。何してんだろう」

その眩きは、容赦なく降り続ける大雨の音に埋もれて迷い込んだ。遠くで轟く雷鳴はその迷子になった言葉を真っ先に見つけ、鋭く貫いた。同時に発せられた雷撃の音は鉛色の空へ反響し、伸二の鼓膜を揺さぶる。

つんざくような雷鳴の響きが耳から抜けた後、彼は暗澹とした街へ目をやった。

砕け散ったあの言葉は、何処へ墜落するのだろうか。幾つもに分散したそれは、まだ伸二の元へ戻って来る兆しを見せなかった。

雨が止み、空に虹が架かる頃には、帰って来るだろうか

コーヒーはブラックに限る。好んで一日に何回も口にするものだからと、彼は自分にそう言い聞かせてきた。淹れる度に砂糖やミルクを入れていては無駄にカロリーを摂取してしまうだけだ。

もっともらしい理由からそれを続けているうち、味覚はあの苦味とわずかな酸味を覚えた。

悪くないと思うようにさえなったが、今日に限ってはコーヒーの鋭利な苦味がやけに舌にまとわりついてくる。

爽やかな朝に、あの雨の日の自分をついつい思い返してしまった事がその苦味を彼に思い出させたのだろう。

その日彼を取り巻いていたのは、嗜好品から記憶に至るまで、全てが苦いものだった。それでも雨上がりを待つ気にはなれなかった彼は、あの雨の日、雷に砕かれた弟を思う言葉を、広い空の中から手探りで探していた。しかし、手はむなしく中空を切るばかりで成果はあがらなかった。

それから数日、彼は考えていた。そして今日がその時だと決めていた。

毎日の朝の時間に余裕を作っている伸二は落ち着いた手つきで携帯電話に手を伸ばす。しばらくそれを眺めていた。少しだけ勇気を振り絞れば、造作もない事だ。今まで散々この瞬間の立ち振る舞いをイメージしてきた。

しかし、そのイメージの中には、なかなか決心出来ない場合、という想定はなかった。必ずいける、という前提でのイメージに、そ

んな逃げ道はあるはずもなかるう。

だが、現実には逃げているのは確かだった。情けない自分の心には悪態をついた。

結局彼は携帯電話をベッドへ放り投げる。

何でこうも、自分達兄弟は……何時からだったっけ。

一連の行動に言い訳をつけるようにして考えたが嫌な気持ちは募るだけで、起き抜けの気持ち良さはすっかりと無くなっていった。

「今年の盆は……どうしようか」

続けざまに彼を襲う現実問題。

カレンダーを見る。

本日、七月九日。

悩める男の耳に、目覚めた蝉達の鳴き声が煩く響きだした。

「どうしたものかな……」

鬱積する気持ちのざわめきに負けじと気合いを入れるため、大股で洗面所へ向かい、勢い良く顔を濡らした。鏡の自分に飛びきりの笑顔を送ってみた。

自らの引きつった、わざとらしい笑いに耐えきれなくなった伸二は、シャツを思い切り脱ぎ去り、叩きつけるように洗濯機へ放り込んだ。

職場へは自転車で向かう。体力をあまり使わなくなった今、せめてもの運動として自転車通勤を取り入れた。効果があがったかどうかはわからないが伸二が自転車好きになった事が唯一目に見えた成

果だった。夏は暑く、冬は寒いが、流れゆく景色は決して速くないスピードで展開してくれる。

そして、その速度は確実に季節の変化を楽しませてくれた。だから、一つ一つの情景について存分に味わう事が出来る。余裕を持って、頭に染み込ませる事が出来る。彼はそこに惹かれてしまった。

それだけではない。

彼はこの地に来て、一人の女性に惹かれる事となる。同じ職場で出逢った、木村千夏という名の女性だ。

何処に惹かれたかと言われれば、彼の描く理想の女性像に合致したと、月並みな表現しか出来ない。

性格や趣味等、あらゆる点で千夏は伸二の心を惹きつけた。彼女が口角をあげて微笑む度に、彼の心は舞い上がったものだ。

そして、そんな千夏もまた、彼との交流の中で伸二の人柄に惹きつけられるようになった。仲の良くなった二人はすぐに打ち解け、愛し合うようになる。その様はまるで自然の成り行きのように静かで、穏やかなものだった。

そして、月日は流れて、世の中は盆という行事で帰省ラッシュを迎えるようになる。全身がとろけるような暑さの中、あのラッシュに巻き込まれる事程、苛つくものはない。

その地獄のうねりに、地元を飛び出して一人暮らしをしている伸二も巻き込まれる可能性は充分あった。

しかし、彼は今、いつもと変わらぬ様子で自宅にてテレビを眺めていた。ニュースが伝えている。今年は例年に比べ気温が高いと。車中にて感じる温度も二度ほど高くなる、と警告していた。

上空から映されているラッシュユの映像で毎年とてつもないほどの車列を拝めることが出来る。それらの車体から沸き上がる陽炎がゆらゆらと揺れていた。確かに、今年はその揺れ加減がいつもより艶めかしく見えた。

しかし、観ているだけでも暑く感じるのに現地はどれだけ暑いのだろうかとエアコンの効いた部屋で呑気に傍観しているのは向坂伸二だった。そして、その隣には千夏が座っている。同じようにそのラッシュユの光景を眺めていた。

『このように今年の日中の気温は例年にも増して高くなりそうですが、夕方辺りから気温は過ごしやすい温度にまで下がるでしょう』

キャスターが伝えていた。

『お盆の夕暮れには快適に家族やお友達とバーベキューや花火が楽しめそうですね』

「だって」

「うん」

伸二が憂うつように返事をした。そのまま千夏がテレビを見つめたまま続ける。

「ねえ、ホント帰らないんだね」

「千夏もな」

その言葉の後、伸二はくすりと微笑む。

「それ言うかなー、明日帰りますから」

「ああそうだった。今日も俺に付き合ってくれてたんだ」

わざとらしいニュアンスが自分でも可笑しかった。伸二のこの態

度に千夏は悔しい気分になる。

「ひどいー！」

彼女の遠慮のない平手打ちが伸二の肩に直撃した。

痛さに耐えるように口を閉ざし続ける彼の姿がすごくまぬけに見える。千夏は盛大に吹き出してしまった。

「そっちこそ……ひどいな……痛っ」

持続する痛み伸二の顔がまた歪んだ。痛がる彼の弱々しい呻き声に被せるように今度は少々遠慮がちに、千夏が今まで気になっていた質問を投げかける。

「ねえ……まだ悪いの？」

「え？」

「だから、盆にはなかなか帰らないって……前言ってたから」

伸二の眉間に寄った縦皺に千夏が怯む。

流石に踏み込みすぎたかも知れない。言った側から自分の無神経さに気付かされた彼女は自己嫌悪し、

「う、ごめん。少し気になって……」

「いや、いいよ」

予想に反した返答に目を丸くさせる千夏。

「俺にも理由なんてわからんのだよな」

遠い目をする伸二の横顔に陰を見た千夏は彼の次の言葉を固唾を飲みながら待つ。

「昔はそうでもなかった。でも、いつの頃からか喧嘩ばつかに」

「へえ……」

決して軽くない口調に千夏の口からはその一言しか発せられない。

「ただ、俺の記憶にはある。あっちがどうか知らないけど」

「ん？」

「俺達がほんの少しだけ近付けた記憶だよ」

「……何？」

千夏の返答を聞きながら伸二は靴下を甲までめくり、自分の足の甲を指差した。

その示された先に千夏が目をやると何やら赤い痕が見える。

「これが？」

「ああ。火傷したんだ」

「火傷？」

「線香花火が落ちてきた」

「嘘……熱かったでしょ？」

取って付けたような言葉が千夏の口からとっさに飛び出した。その言葉に対して伸二がにっこり笑いながら言う。

「確かに熱かった。でも線香花火が好きになったけどね」

どこか誇らしげなその笑顔に千夏は頭を捻った。彼女がそれに見とれていると、遠くしていた目を更に遠くさせて伸二が呟いた。

「なあ……」

「え？」

我に帰った千夏は素っ頓狂な声色で慌てて対応する。そんな裏声のおかしさに彼女は顔を赤らめたが、伸二は気にする素振りも見せない。

ただ、漠然とこう口にした。

「俺って不器用なのかな」

「……え」

「……いや、何でもない」

意味深な言葉が涼しく響いた。

狭いキッチンから聞こえてきた水滴の滴る音はエアコンの作動音の中に消える。

伸二の言葉も千夏の中で後を引くように消えていった。

「不器用……だとは思わないよ。私は」

俯きながら小さく言う千夏の方を向いて伸二がゆっくり口を開いた。

「今夜……付き合ってくれないか？」

無機質な機械の音に混じった伸二の低い声。

いつも甘くて、それでいて凜としているこの声が、千夏は好きだった。

「何処へ？」

「さつきも言っただけど……俺は線香花火が好きだ。そしてやっぱり俺は不器用なんだ」

続けて、答えになってないよ、と千夏が冷静に言った。

しかし言葉の裏で、彼女の瞳はその冷静さを持ち合わせていなかった。

伸二の抱く真意について口で答えを聞くよりも、実際にそれについて自身の肌で感じたいと強く思った。

一体、何が飛び出し、何が起こるのだろうか。無邪気な好奇心が彼女の本能をくすぐる。

そして、本能とは別の彼女の静かな理性は、伸二への果てなき興味に注がれている。淡い期待と醒めようのない気持ちがあドレナリンのように全身を巡る。

そして、その不思議な熱情に千夏は胸のときめきを感じる。幼い頃の初恋の気分に近いのかもしれない。

真夏の夜というのは独特の開放感があるものだ。昼のニユースが言っていたように、盆も近い今夜の気温は肌触りがよく、昼間の熱気を申し分ないほど抑え込んでくれていた。

だから、余計に開放的になってしまふのだろうか。救急車とパトカーが蝉の鳴き声のように耳につくサイレンを流しながら、夜の街を忙しなく走っていた。

誰がどう羽目を外しすぎようが、伸二には関係なかった。特に今夜に限っては、他人に関心を注ぐほど、心に空きを作っていない。今の自分は、隣を歩く千夏への気持ちと、ある思いを抱き続ける事しか出来ないのだ。

やがて彼らの足並みは、由緒正しい立派な佇まいを魅せる、木製の門の前で止まった。内側に開いたその門には鉄製の門が施されており、閉門の際には重厚な錠の役割をするのだろう。まだ閉門までは時間があるらしく、開けたその先にはぼつり、ぼつりと光芒が浮かんでいる。

そしてそれらによって、美しく照らし出される並木道は華やかで落ち着いた印象を放っていた。しかし、この庭園は異様なまでに静寂に包まれていた。

人をあまり寄せ付けないような雰囲気もこの場所には皮肉ながらお似合いの空気かもしれない。この静寂が見事な雰囲気作りに貢献しているのだから。

時刻は午後八時。夏の日がようやく沈んだ頃だった。

「うう、なんかすごく寂しいよ」

「俺は案外好きだけどな。地元を思い出す」

どんな地元だろうかと千夏は疑問に思った。

彼の地元についてはあまり知らない。

「地元ねえ」

千夏の目が泳ぐ。

庭園に隣接するお社とその横にぼつりと設置されている小屋が目に入った。見るものに一層古めかしさと寂しさを与える光景だ。

「でも、確かにここで花火つても悪くないかもねえ。ちょっと怖いけど、私はそんな雰囲気嫌いじゃないし、何より線香花火のイメージにぴった」

そこまで言い切つて千夏は自分が見事に独り言を話していたという事に気が付く。彼女が伸二を振り返った時、彼は例の社の隣の小屋から手を振っていた。彼のその姿を見た千夏は顔を紅く染めながらも羞恥に何とか耐える。

「もう!」

歩き出す千夏。徐々に恥じらいの薄れる彼女の顔に残ったのは豊かで、朗らかな微笑みだった。

「これ代金ね」

「どうも」

伸二が小屋の店番に代金を渡し終える頃、後ろから千夏が追いついた。またあの平手が彼の背中を直撃した。じんと来たが昼間のそれより、柔らかさがあつた。

「ほつとかないでよ!」

「悪いねえ」

少しばかりの悪戯ぼさを伸二はたまに醸し出す。今回のように実行に移される時もあるれば、影でこそこそ策略を立てるような真似もする。その計画が成功した試しはなかったが。

そんな気質が今日も現れた。無邪気に舌を出した彼がおどけながら微笑む。千夏はそれにバツの悪い表情で返すと、彼女の視線は伸二の手へ伸びた。

「何買ったの?」

「彼女さんもどうだい?」

伸二よりも先に店番の親父が口を開いた。体躯が良く、浅黒い肌がねちねちと輝いていた。しかし気前は良い。閑散としたこの場に、久しぶりの客が来た事が彼の盛り上がり拍車をかけてもいるのだろう。

「は……はあ」

千夏がたじろんでいると伸二が言った。

「絵馬だよ。絵馬。願い事を書いて、飾るんよ」

「絵馬？」

絵馬。

確かに、先ほどから伸二は真剣な眼差しでそれに向き合っている。小屋 売店の灯りはあるが、伸二の頭の影で何を書いているのかは見えない。

「じゃあ、私にも」

「まいど。愛の誓いでも書くのかい」

「……はあ……」

千夏は流石に苦笑した。しかし、まんざらでもない自分がある事にも苦笑するしかない。嬉しいとも思い、妙な気まぜさも感じた。

そんな気持ちを悟られまいと意気込んだ時、伸二の横顔が視界に飛び込んできた。

彼の横顔をじっと眺めているうちに

ときめきはつつい、好奇心を煽る。一体、何を書いているのだろうか。

お願い事って？

千夏はそこに胸の高鳴るような期待を込めずにはいらなかった。

あなたは、何を願っているの？

闇に二輪の花が咲いた。

音もなく弾け、無数の花を咲かせては散らすそれらを見てみると、瞳の奥から吸い込まれそうな、異質な感覚を覚える。触れられるものなら触れてみたい、線香花火を眺めながら千夏は切望した。

伸二に尋ねる時だ。この状況の起因でもある、一つの記憶。

「伸二君言ったよね……線香花火での火傷の話。だから、好きになった……って」

臆気な火の舞いだけが、場を引き立てる。花火を眺める伸二の出で立ちは何も聞いていないような気さえする。

千夏が再び口を開こうとした。その時、伸二と発声のタイミングが被さった。

「昔の話なんだけどな。盆に親戚一同が集まって、小さな花火大会をしたんだよ。火傷はその時出来た。線香花火で、ぱちりと」

「そこで？」

「そう。……弟と一緒にな」

引きつった笑顔を見せた伸二と、息を飲む千夏。

「妙な話で、少しばかり距離が近くなった。まあガキの頃の話だから、そんな事に影響受けやすかったんだろうな」

言い切ると同時に線香花火は墮ちた。

千夏はその目に微かに映った、静かに口を緩める伸二の表情を見

逃さない。

「そっか……だから、好きなんだ」

彼女の中にて、今まで自分の知らなかった伸二の過去が今の彼と繋がる。

「俺はやっぱり不器用だな。こんな事でしか表現出来ない」

「もしかして、それが言いたかった……とか？」

「違う。俺は同情がほしくて言ったわけじゃない。ただ……誰かに伝えたかっただけなんだ」

千夏はそれに反応を示さなかった。

暫くして彼女はおもむろに、先ほどの絵馬を伸二の傍らから手に取り、それに目をやった。

「いつまでも一緒にいられますように……」

言い切って、頬が紅潮するのを感じた。しかし、それ以上に頬を染めたのは不意を突かれた伸二の方で 彼は慌ててそれを奪いにかかる。

はちやめちやな取り合いを二人は楽しんだ。

そして、ようやく絵馬を伸二に返した千夏が優しい視線を伸二に向け、語りかけた。

「不器用だったらこうやって書けないよ。でも、兄弟の方では不器

用なのかも。ゆっくりと伝えて行けばいいと思うよ。いざとなれば私^がが力になるからさ」

とても愛おしく、永遠のようにさえ感じられる一言。自分には勿体無いとさえ思われた。その償いのように線香花火を千夏に手渡す。

「いけるよな。きっと」

最後の火が灯った。儂く、褪せた灯りが二人を包む。
伸二には、これが最期の輝きだった

向坂慎吾は震えていた。木村千夏の口から語られた兄の真実。

慎吾にとつて、到底それはただの恋人同士ののろけ話だとは思えなかった。弟は自分の知る向坂伸二という人物のピースが確実にまっけてゆくを感じていた。

その感覚に軽い目眩を感じ、それを堪えるように目を閉じた。

「兄貴はそう言ったのか、線香花火が好きだったって……」

「ええ」

千夏の言葉に続けるように慎吾が靴を脱ぎ、靴下も脱いだ。その行動の推測は千夏の頭の中でとうになされていた。

しかし、これから慎吾の発しようとする言葉の読みは千夏のそれを大きく上回った。

「俺も不器用だ」

火傷の痕を示しながら神妙な面持ちで慎吾が言った。伸二のそれとほぼ同じ位置に残る痕を千夏は凝視した。

「俺もそんなだから……兄貴には伝えられなかった。気持ちと同じだったんだ……」

その言葉に千夏は目を丸くした。慎吾の顔は、やりきれなさに歪んでいる。

「兄弟だったのに」

慎吾がぼそりと呟く。狼狽した声色に暫く千夏は言葉をかける事が出来なかった。

自分の憶測の域を飛び出している展開に、胸が痛い。
沈黙は慎吾が破った。

「でも……何故俺を昨夜ここに？それに、兄貴の思いつて……」

彼は自分の頭に渦巻く疑問を素直にぶつけた。動揺している思考の中で言葉を選びすぎる余裕など無かった。
千夏が頭を振るう。

「あなたに少し気付いてほしかった」

「だから千秋を向かわせた？」

「早い話、そう……」

早い話？

突っかかるニュアンスだった。その言葉に慎吾が訝しげな表情で問いただす。

「昨夜どうやって俺をここまで連れ」

「今は」

慎吾のまくし立てるような口調に対し、千夏の口調は頑固たるものだった。その意思に、彼は口をつぐんだ。

「今は、聞いて」

「……ごめん」

無くなつた言葉の流れていたのは、長くもあり、短くもあつた静寂の中。その沈黙はすうと、水のように、溶けるように、晴れていった。

「ちょうど今日で四年なんだ。四年が経つた」

それだけ告げて口を閉じた慎吾は千夏からの言葉を待つ。じつと静かに彼女の瞳の奥を見つめながら。

それをしっかりと受けている彼女も物言いたげな表情をして慎吾を見つめている。

互いが互いの中に何かを見出そうとしていた。それにいち早く反応したのは木村千夏だ。味わつた事のない不思議な気持ちが彼女をにわかに興奮させた。

「よく似てるね。伸二君に」

伸二

「……そう？」

昔の自分がそう言われていたらどんな気分だっただろうか。きっと、穏やかには思っていないはずだ。

慎吾の頭には兄の顔と共に、そんな思いが浮かんでいた。そして彼は千夏の瞳の中に、在りし日の兄を見たような気がした。

兄はこの瞳に見据えられ、彼女もまた、その瞳を捧げていた。千

夏の瞳に今も灯るのは変わらず兄を思う、線香花火のような灯りに
違いない。

そんな千夏の言葉に対して、慎吾がどこか嬉しい気分をまどつて
いるのは事実だった。そして、それ以外にも彼は妙な気分连心を弾
ませる。

「本当は似ていたんだ」

そっくりだった、と続けた。

「それを知っていた彼はこれを残して逝ってしまった」

そう言いながら千夏がバッグの中から何かを取り出した。やりき
れない、といった風にそれを慎吾に手渡す。

「あの日の翌日、もう一度私だけでここに来た。彼の書いた絵馬が
もう一度見たくてね。その時、彼の書いた二枚目を見つけた。それ
よ」

「……」

しばらくそれを眺めていた慎吾だったが、次第に彼の身体は小刻
みに震えだした。

鼻の頭を鋭利な何か貫き、瞼にも重さが加わった。制御の効か
なくなつた感情が今にも溢れ出しそうで、仕方がない。

次第に鼻をすする音が寂れたその場所に小さく響きだした。嗚咽
が続くのに、時間はいらなかった。

「兄貴……」

「どうしても知ってほしかった」

いたたまれない気持ちは千夏にもわかる。あの時、彼を失った時、自分も全てを否定した。

何故彼なのか。何かの間違いではないのか。しかしそんな事、ただ、虚しくなるだけだった。

だが今、自分がそれに浸る事は許されない。

向坂伸二は彼の兄だ。血も繋がり、受け継ぐものもある。だが、彼は遅すぎた。

だから二人のためにも、自分が務めを果たさねばならない。

彼女の目には、崩れそうになる身体を必死に奮い立たせようと、涙を拭う慎吾の姿があった。

「私に見られた一枚の他に伸二君は絵馬をもう一枚購入してたの」

耐えきれなくなった慎吾は千夏から手渡された絵馬を胸に抱えるようにして崩れ落ちる。どさっ、という鈍い音が彼の泣き声に混じった。

「これが、兄貴の願いだった……」

その様子を見下ろすように見ていた千夏も目尻に涙を溜めていた。やがて、その泪が彼女の頬を伝う。彼女に何の感覚さえも与えずに流れたその雫は音も立てずに石畳の上に弾けた。

「私の役目は、その一枚を渡す事」

ありがとう、という言葉が言葉にならなくて、慎吾はひたすら頷き続ける。

もう何もかも、許される気がした

再び辺りは静寂に支配された。

僅かながらに聞こえてくる両者のすすり泣きもすでにこの静けさの中に溶け込んでいる。

「兄貴とは昔から仲が悪かった。でも俺もあの時、不思議と嬉しかった」

近くのベンチに腰を下ろしていた二人は神妙な面持ちをぶら下げて話していた。

星が輝いて、月が光り、雲が流れる。蛙と虫の鳴き声が冷たい夜風に乗ってくる。

「あの火傷した時？」

「泣きながら水で冷やして、薬を塗って……一緒に笑った」

「……」

「嬉しかった」

続く言葉はなくそこからはただ、木々と虫や蛙達の鳴き声が響くだけだった。ことさらよく響くそれらの宴は二人の心に透き通るように流れてゆく。彼らの心が、決して負の方向に染まっていない証なのかも知れない。

ただ、ひたすら気持ちの良い今の状況に、慎吾は頭を振って付け加えた。

「兄貴は家族だ。好きだった……」

喉が詰まる。今になっては勝手な言葉だろう。しかし、その先に続く言葉も、真実であり紛れも無い慎吾の本心だった。

「伝えたかったな……」

「きつと、彼もわかってる。思いは届かなくても……私が伝える」

強い意志を宿した千夏の言葉に慎吾は精神の震えを感じるのと同じ時に、薄ら寒い違和感を覚えた。

『早い話はそうよ』

『私が伝える』

慎吾は熱くなる胸の焦げ付きの裏で千夏のこれまでの言葉を思い返す。

そして、彼の意識は再び昨夜に遡る。そこで、また同じ疑問を抱く。

『昨夜の記憶は何故……？』

「なあ……教えてくれないか？」

慎吾が優しく諭すように発する。それと同時に彼の瞳は千夏へ移る。

臆気に奇妙な存在に変わりつつある女性の姿を、無意識のうちに

確かめる慎吾の眼差し。それを千夏は、変わらぬ表情で受け入れた。

今宵の満月は並びあって座る二人の姿をありありと照らしている。青白く浮かぶ慎吾の顔を見つめている千夏の表情もまた、青白く彩られていた。

しかしそれ以上にその表情は悲しげであり、清々しかった。

「君は誰だ？」

慎吾は正直にそう言った。

二人が出会ってから時間はそう経過していない。しかし、その時間とはとつともなく濃密な時間だった。にも関わらず彼はそう言った。更に慎吾は自分の目の前に座る女性の名前をすでに彼女自身の口から聞いている。

つまり彼が聞いたのは、千夏の素性のような単純な事実ではない。

もっと別次元、魂への問い掛け……極端な話　人間か否か？

その疑問が慎吾の頭から迷いなく飛び出してきた。

そんな事を口に出せたのも彼の瞳が捉えたものが原因だった。

それを見たから彼は、その疑問を言葉にする決意が出来た。

再度それを確認した慎吾は前へ向き直り、遠くで優しい灯を宿している灯籠を見つめ、呟くように口を開いた。

「君の影が見えない」

園内の木々が荒々しくざわめいた。叫び声をあげているようなそのざわめきは闇色に染まっている葉を、容赦なく削ぎ落とす。

互いの髪が風に揺れ、千夏の方からは甘いシャンプーの香りが漂

ってきた。

二人の間に言葉は無く、風が止んだ後も慎吾は前を見据え、千夏はぼんやりと夜空を見上げていた。

「私も人の事、言えなかった」

終わりといっても夏は夏だ。

それなのに息を吐けばそれが白く残りそうな程、肌寒い。ようやく切り出された千夏の言葉も白く残りそうな程、凍えていた。

「家族の面では不器用なのかもねって……伸二君に言ったの」

慎吾の肩がびくりと動いた。それを横目で感じつつ千夏が続ける。

「なのに私は……全てにおいて不器用だった」

その言葉に慎吾の心臓が高鳴った。そして頭に浮かぶ閃きに肌が泡立つのを禁じ得ない。

全てにおいて不器用

衝動に突き動かされるように彼が立ち上がる。

そして、足早に隣接する社に向かった。そんな彼の後ろから千夏が呆然とした口調で呼び掛ける。

「どっしたの？」

「絵馬に何を書いたんだ？」

「え？」

「君は何を願ったんだ？」

そう言い残して、慎吾は社へ辿り着き、無数の絵馬を目の当たりにする。

灯笼と月明かりを頼りにその中からある一枚を懸命に探し出す。沢山の人々の願いがそこにはあった。皆、抱くものは違えど、その根本にある真理は全て同じように思える。

向坂伸二も木村千夏も、そんな何気ない願いを胸に秘めていた、普通の人間だった。

そして、向坂慎吾もその一人にすぎない。だからこそわかる気がした。無数の願いの中から一握りを掴み取る事は、そう難しい事ではないはずだと。

そして、彼の手に一枚の絵馬が触れる。
彼は確信した。

無数の絵馬の中からその一枚が吸い込まれるように慎吾の手へ舞い込んだ。丁寧になんかそれを外すと、ぼやけた絵画が描かれている表面が目についた。

裏を返すと、同じように薄くなりかけた達筆な文字が目に入る。消え入りそうなそれを追って、彼はそこに書かれていた願いにやるせない気持ちを隠しきれなかった。

唇を噛み締めて、自然と溢れる涙を拭う。

『いつまでも伸二君といられますように』

『千秋が早く元気になりますように』

互いに間を置いて書かれた二つの願いは、慎吾の中で千夏という人物があの日から辿ったであろう道のりを悟らせるのに十分な効力を持っていた。

それはとても険しく、辛いもので、そして

彼はそこまで考えて、それをかき消すようにしながら、千夏の言葉を否定した。

「君は不器用なんかじゃない」

後ろの千夏を振り返る。呆然と立ち尽くす彼女の潤んだ瞳を見た慎吾は絵馬を掲げて、続ける。

「不器用だったら、こんな事、書けないよ」

何処かで聞いた台詞。

いや、自分の言った台詞か。

千夏は追憶した。でも違う。

でも違うんだよ。私は『全て』において不器用なの

彼女は自身の中で断言した結論を余すことなく慎吾へ伝えた。

「全て？」

千夏がこくりと首を振る。

「だから、私は……あなた達を巡り逢わせたのかもしれない。こんな不器用な方法で自分勝手に……自分への償いとして」

「……そんな」

「踏ん切りつかなくて、妹まで巻き込んだ……」

また風が吹いた。

次は肌にまとわりつくようなぬるい湿気を運んできた。

しかし、慎吾の言葉に混じり気はなかった。

「いいんだ。俺は感謝してるから」

彼の後ろで、無数の絵馬達が風に揺れ、音をあげた。からん、からんと笑っている。

溢れる涙をなすがままに、慎吾は夜空を見上げる。彼の瞳に広がる満月は緩やかに波打っていた。

蒸し暑い風が吹きはしたが涼しくて、ついつい甘えたくなるような夏の終わりの夜。そんな夜に揺らめく陽炎は決して姿を見せない。しかし今宵、月明かりの下、とある二つの『陽炎』は巡り逢った。

兄の死後、弟に漸く宿った兄への思い。

生前、弟に伝えられなかった兄の弟を思う気持ち。

共に決して交わる事はなく、自身の中にだけ存在し、陽炎のように悩ましく揺らめいていた思い達。

それが長き年月をさまよいながら、今、ここに巡り逢った。

慎吾の目から流れ落ちる涙は月明かりを吸い込んで、黄金に染まる。

その後ろで同じように涙を零す千夏の涙は灯籠の灯を吸い込んで、紅く彩られていた。

「本当に」

今日はとても形容し難い夜だった。しかし、大切な夜である事に違いはない。それをもたらしてくれたのは君だ。

慎吾が千夏を振り返る。

振り向き様に涙が宙を舞うように流れた。

それでも溢れる涙をよそに、慎吾の言葉はぶつりと止まった。

千夏がいらない。

「お、おい！」

慎吾の叫びは無情に響く。返ってくる自分の木霊が彼の耳に何度となく響いては小さく消えてゆく。しかし、

「ありがとう」

消え入るような千夏の声。

それでも透き通る綺麗な美声は、不思議な安らぎを伴っていた。それが慎吾の鼓膜を優しく撫でて、彼の顔をほころばせる。

その声の主の方へ意識を向けると、それは自ずと向こうの木立へと流れていった。

千夏が佇んでいる。

「ああ、こちらこそ……本当にありがとう」

諭すような慎吾の言葉。低い声が伸二の声とよく似ていた。

懐かしくて優しいその響きにくすりと千夏が顔を崩す。無邪気な微笑みの下に隠れていた感傷が、また焦げ目をつくったように、目にたまっていた泪が一気に溢れ出した。

静寂の包むこの場所で、その様子は慎吾の目にことさら大きく映った。

向坂慎吾は一人きりだ。

時刻は午後八時半。

閉園までもうわずかしかない園内で彼は木村千夏の残像を探した。涙で潤む目をして微笑んでいた彼女は溶けるように消えていった。

闇が彼女を取り込むのではなく、彼女が闇へ向かって行くような旅立ちを思わせるあの瞬間が、まざまざと目に焼き付いている。

しかし、とても自然だったその出来事に、慎吾はまだ彼女がどこかにいるのでは、隠れているのではないだろうか、という錯覚さえ覚えている。

しかし本当に彼女はもういない、という事など充分わかりきっていた。なのに、探してしまうのは何故だろう。

闇に紛れ込んだその疑問は溶け込まないうちに、一つの結論を伴って慎吾に舞い戻って来た。

『もっと、兄の事を聞きたいのかもしれない』

突如兄を知る人物が目の前に現れて、慎吾の心を揺さぶった。

その静かながらに熱き動揺が闇に紛れた疑問に灯りを灯して彼に戻って来た。

しかし、そうだとしてもあまり深くは考えまい。

と、慎吾は意気込んだ。

これは区切りであり、決別の出来事なのだろう。

そして、忘れるという事ではなく、次へ昇華させるための物語だったのだ。

生きている自分は、前に進むしかないのだから。
しかし、静寂と寂しさに包まれている場の空気が手伝って、彼のその意気込みは慎吾の肩を落とした。
何だろう、この気持ちは。

いつまでも彼は夜空を見上げていた。

心が晴れるのを待つように、星の瞬きと、月の輝きに思いを寄せている。やがて雲が無くなっている事に気が付いた。

それでもそのうち寂しくなつて、また涙が零れそうになる。そして寂しさと共にある、喜びに慎吾の心は葛藤した。

彼をあざ笑うかのように響き続ける蛙と虫達の共鳴は慎吾のその心のぶつかり合いに無邪気に介入しては弾かれ続けていた。しかし、彼等は執拗に鳴き続けている。夜の帳が上がるまでその宴は続いていく。

慎吾の歩みはとても静かだった。ここでの出来事をゆつくりと踏みしめるように、自然のざわめきの中を確実に歩んでいく。

その足取りのまま、間もなく閉園の園内を抜けた。この街での思いを抱き、駅へ向かう。

そして、ホームに滑りついた電車に乗り込み、自分の街まで揺られていた。本格的に夜の顔へと姿を変えた街を遠目に相変わらず閑散とした車内で慎吾は俯いていた。

空き缶が転がっている。

レールの滑らかな接触にも反応するそれは、慎吾の足に、かつんと当たった。しかし彼は気にする素振りを全く見せない。スーツ姿のいびきも受け流しているかのように微動だにしなかった。

そんな慎吾の頭を埋めるのは、木村千夏が存在だ。

愛する人達を亡くした彼女は、自分は『全て』において不器用だったと、そう言った。

どうする事も出来ない絶望に打ちひしがれて、彼女もまた、陽炎のように揺れる思いを抱いていたのかもしれない。

『愛する人達のそばにいたい』

その結果がどうであれ　彼女は今、愛する人達のそばにいるのであるうかが。

この出来事が慎吾の耳元で囁き続ける。決して、忘れてはならない、と。

もちろん、彼にそのつもりは毛頭なく、忘れられるはずもなかった。さらに一連の根底には苦しみや悲しみが存在している。慎吾にとって片手間に晴れやかな気分になれる一日ではなかった。

しかし、悲しみや苦しきも今はきつと報われているはずだ。そう感じながら彼は再び、巡り逢った陽炎を思い返す。

そう、報われるぞ。

兄貴も願っているのだから。

『千夏と幸せでいられますように』

『慎吾を守って下さい』

やがて慎吾を乗せた電車は速度を下げ、駅のホームに滑り込んで行く。聞き慣れたアナウンスを背にし、右の扉へついた。扉が静かに開く。そして、慎吾一人を降ろし再び電車は動き出した。

誰もいないホームには過ぎ去った電車の音が静かに木霊して、後を引くように消えていった。それを呆然と感じながら、慎吾は肌にまとわりついて来た熱気に疑問を感じる。乾いたはずの汗が再び、じんわりと肌を伝うのを感じて、疑いは深まるばかり。何故、急にこんなに暑くなったのだろうか、と。

夏は終わりにさしかかっている。
しかし、まだまだ駅構内に立ち込めている嫌な蒸し暑さに、彼は夏のしぶとさを感じずにはいられなかった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9932u/>

巡り逢う陽炎

2011年10月9日11時58分発行